
金木犀の咲く頃に
～清楚な彼女の、初めての夜～

金木犀の咲く頃に【体験版】

蜜夜文庫

～清楚な彼女の、初めての夜～

蜜夜文庫【体験版】

……

第一話　金木犀の香りがした日

大学の図書館は、秋の夕方がいちばん好きだ。

西日が斜めに差しこんで、本棚の背表紙を金色に染める。空調の低い唸りと、たまに聞こえるページをめくる音。それ以外はとても静かで、ここにいると自分の呼吸の音まで聞こえてくる気がした。

わたしは三階のいちばん奥、誰も来ない閲覧席が定位置だった。文学部の二年生。詩織、という名前のとおり、昔から詩や物語を読むことだけが取り柄の、地味な学生だ。サークルにもなじめず、合コンに誘われたこともない。化粧は薄く、髪は染めたことがない。同級生からは「真面目だね」と言われる。たぶん、それは褒め言葉ではない。

教室では、いつも会話の輪の、ひとつ外側にいた。みんなが笑っているとき、わたしはどこで笑えばいいのかわからなくて、ノートの端に意味のない模様を描いていた。だから、図書館のこの席は、わたしにとって、唯一、息のできる場所だった。誰の目も気にしなくていい。物語の中の登場人物だけが、わたしの友だちだった。

そんなわたしの世界に、航さんが入ってきたのは、半年前の春のことだ。

同じゼミの四年生。卒論で図書館に入りびたっているうちに、いつのまにか言葉を交わすようになった。最初は、ただの「お疲れさま」だった。それが「その本、面白い？」になって、「俺も昔それ読んだよ」に

なって。気づけば、わたしたちは、夕方の図書館で、当たり前のように顔を合わせる仲になっていた。

背が高くて、笑うと目尻に皺ができる。声が、低くて、やわらかい。わたしはこの人の声を聞くと、なぜか肩の力が抜けてしまう。教室では息を潜めているわたしが、この人の前でだけは、少しだけ、自分の言葉で話せた。

その日も、わたしは閉館近くまで近代文学の課題に向き合っていた。

「……まだいたんだ、詩織ちゃん」

声に顔を上げると、航さんが立っていた。

卒論で疲れているのか、目の下に、うっすらと隈があった。それでも、わたしを見つけると、ふっと表情がやわらぐ。その変化に気づくたびに、わたしの心臓は、勝手に跳ねる。

「先輩こそ……卒論、進んでますか」

「全然。逃げてきた」

そう言って、航さんはわたしの向かいの席に、当たり前みたいに腰を下ろした。机一つ分の距離。それだけで、心臓が少し速くなる。気づかれませんように、と祈りながら、わたしは課題のノートに目を落とした。

でも、文字が頭に入ってこない。

さっきまであんなに集中できていたのに、この人が前にいるというだけで、世界の解像度が変わってしまう。ペンを持つ指先が、妙に意識される。彼が頬杖をついて文庫を読む、その横顔ばかりが、視界の端をちらついた。

「詩織ちゃんはさ」航さんがふいに言った。「いつもひとりだよね、ここ」

「……はい。人が多いところ、苦手で」

「俺もだよ」

え、と顔を上げると、航さんは本棚のほうを見ていた。横顔に西日が当たって、まつげの影が頬に落ちている。

「みんなでわいわいするの、得意なふりはできるけど、ほんとは疲れる。ひとりで本読んでるほうが、よっぽど落ち着く」

意外だった。航さんはゼミでもいつも輪の中心にいて、誰とでも自然に話す人だったから。発表のときも、よどみなく喋って、教授に冗談まで言ってのける。わたしには、まぶしくて、遠い人だと思っていた。

「だからかな」と航さんは笑った。「ここで詩織ちゃん見つけると、ちょっとほっとするんだ。あ、同類がいるって」

同類。

その言葉が、胸の奥のやわらかいところに、すとんと落ちた。

わたしは何か気の利いたことを返したかった。でも喉が詰まって、結局「……そうですか」としか言えなかった。耳が熱い。きっと赤くなっている。下を向いて、髪で顔を隠した。

航さんは、それ以上は何も言わなかった。ただ、わたしの隣で静かに文庫本を開いて、ページをめくりはじめた。

ふたりぶんの、ページをめくる音。

それがなんだか、内緒話みたいで、わたしは課題を進めるふりをしながら、その音だけをずっと聞いていた。彼がページをめくる、その指。節のはっきりした、男の人の手。なんでもないその手を、わたしは、い

つから目で追うようになったんだろう。

「……あのさ」

ふいに、航さんが、文庫から顔を上げた。

「詩織ちゃんって、好きな作家、誰？」

「え……っと、樋口一葉、とか」

「渋いな」彼が笑った。『たけくらべ』？」

「……はい。あの、美登利が、最後に、なんにも言わなくなっちゃうところが、好きで」

言ってから、しまった、と思った。地味で、暗い趣味だと思われたかもしれない。でも、航さんは、真面目な顔で、頷いた。

「わかる。言葉にしないからこそ、伝わるものって、あるよな」

その瞬間、わたしの中で、何かが、こくりと音を立てた。

ああ、この人は、わかってくれる。わたしが、うまく言葉にできない気持ちを、ちゃんと、すくい上げてくれる。教室の誰も、わたしの好きなものを、こんなふうに受け止めてくれたことはなかった。

閉館のアナウンスが流れて、わたしたちは並んで階段を降りた。
自動ドアを抜けると、外はもう暗くて、空気がひんやりしていた。秋の夜のにおい。そして——ふっと、甘い香りが鼻をかすめた。
「あ」
思わず声が出た。
「金木犀」と航さんが言った。「図書館の裏、咲いてるんだよな」
オレンジ色の小さな花。香りだけが先に届く花。子どものころから、この季節になると胸がきゅっとなる。なんでだろう。嬉しいような、寂しいような。
「わたし、この香り、好きです」と気づいたら口にしていた。「すごく好きなのに、ちょっとだけ、泣きたくなるんです。変ですよね」
航さんは、すぐには答えなかった。
街灯の下で、わたしのほうを見ていた。いつものやわらかい目で、でも、いつもと少し違う色で。
「変じゃないよ」
低い声が、夜の空気に溶けた。
「いいものほど、終わりがあるって、なんとなくわかるからじゃないかな。金木犀って、すぐ散るし」
終わりがある。

その言葉に、なぜか胸が締めつけられた。航さんは四年生だ。あと半年もすれば、卒業して、いなくなる。図書館のこの時間も、ふたりぶんのページの音も、きっと、もうすぐ終わる。

春に出会って、夏が過ぎて、もう秋。季節が一つ巡るたびに、彼との時間は、確実に、終わりに近づいている。わたしは、そのことから、ずっと目をそらしてきた。

そう思った瞬間、目の奥が熱くなって、わたしは慌ててうつむいた。

「……詩織ちゃん？」

「なんでも、ないです」

でも、声が震えていた。ばれている。きっと、ばれてしまった。

こんなの、ただの後輩が、卒業する先輩に対して抱いていい感情じゃない。わかってる。わかってるのに、止められない。この半年、わたしはこの人の隣にいる時間だけを、生きる理由みたいにしていた。朝、目が覚めて、今日も図書館で会えるかもしれない、と思うことだけが、わたしを大学へ向かわせていた。

沈黙が落ちた。金木犀の香りだけが、ふたりのあいだを流れていく。

そのとき、航さんの手が、そっとわたしの頭に触れた。

大きな手のひらが、髪をやさしく撫でる。子どもにするみたいな、でも、子どもにするのとは違う、慎重な手つきで。

「俺さ」

航さんの声が、いつもより近くで聞こえた。

「卒業したら、もう簡単にはここに来られなくなる。詩織ちゃんに会えなくなる。……それ、考えると、けっこうきついんだ」

顔を上げられなかった。

上げたら、きっと涙がこぼれてしまう。だから、わたしはただ、頭に触れる彼の手の温度だけを感じていた。指のあいだを、髪が、さらさらとすべっていく。その感触が、こわいくらい、優しかった。

「迷惑、だったら言って」

そう前置きして、航さんは続けた。

「もう少しだけ、詩織ちゃんと、ちゃんと一緒にいたい。図書館の中だけじゃなくて」

心臓が、痛いくらいに鳴っていた。

これは、夢じゃないだろうか。何度も想像して、そのたびに「ありえない」と打ち消してきた言葉が、いま、ほんとうに、この人の口から出ている。地味で、なんの取り柄もないわたしを、この人が。

わたしはゆっくりと顔を上げた。

街灯の光の中で、航さんがわたしを見つめていた。緊張した、少し不安そうな顔で。いつも余裕たっぷりに見えるこの人が、こんな顔をするんだ。それがわかった瞬間、わたしの中で、ずっと張りつめていた何かが、ほどけた。

「……迷惑じゃ、ないです」

やっと、それだけ言えた。

「全然、迷惑なんかじゃ、ないです。わたしも――」

続きは、言葉にならなかった。

代わりに、頬に、つうっと熱いものが伝った。涙だ。我慢していたのが、ぜんぶ溢れてしまった。情けない。こんなところで泣くなんて。せっかく、想いを伝えてもらえたのに、ちゃんと、言葉を返せない自分が、もどかしかった。

でも、航さんは笑わなかった。

そっと身をかがめて、わたしの涙を、指の腹でぬぐった。その指が、頬に触れたまま、止まる。

顔が、近い。

彼の吐息が、唇にかかる距離。金木犀の香りと、彼のシャツの、洗剤の匂い。世界の音が、すうっと遠ざかっていく。心臓の音だけが、やけに大きく、耳の奥で響いていた。

「……いい？」

かすれた声で、航さんが訊いた。

わたしは、答えられなかった。声の代わりに、ほんの少しだけ、目を閉じた。

それが、答えだった。

――この続き、はじめての夜は、製品版で。（全3話・約14,500字）